

紀 要

第 6 号

目 次

粟津湖底遺跡出土の木質遺物	(伊東隆夫)
弥生時代の木偶と祭祀 —中主町湯ノ部遺跡出土木偶から—	(濱 修)
県内における磨製石斧の消滅年代について	(井上洋介)
土師器甕の変遷とその背景 —近江型土師器成立への諸段階—	(大崎哲人)
草津市笠山古窯出土遺物の紹介	
—笠山古窯の位置づけをめぐって・瀬田丘陵生産遺跡群の検討—	
	(畑中英二)
倭京の実像 —飛鳥地域における京の成立過程—	(相原嘉之)
近江八幡市大手前・御所内遺跡出土の銅印をめぐって	(田路正幸)
将棋史研究ノート(3) —王将と玉将—	(三宅 弘)
近江国坂田荘の開発(中) —長浜市大東遺跡を中心として—	(北村圭弘)
滋賀県八日市・永源寺地域における蔵王産花崗岩製中世石造美術の分布	
—八日市市・永源寺町石造美術石材分布調査概要—	(兼康保明)
滋賀県出土の埴輪資料集(その3)	(稲垣正宏)

1993. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

滋賀県草津市笠山古窯出土遺物の紹介

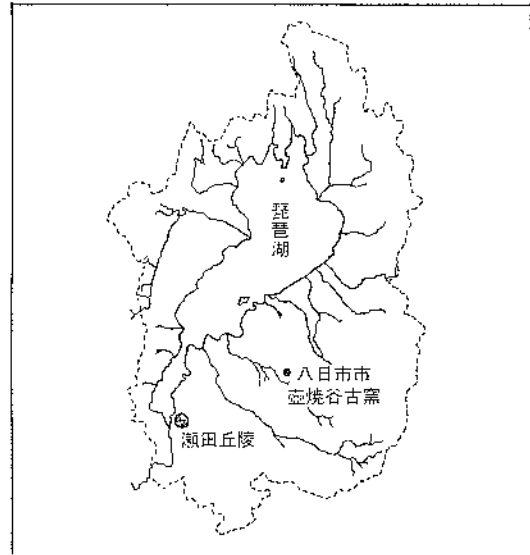
— 笠山古窯の位置づけをめぐって

・ 瀬田丘陵生産遺跡群の検討 —

畑 中英 二

1. はじめに

小稿においてとりあげる草津市笠山古窯は、位置的には窯体は草津市に、灰原は大津市に属する須恵器窯である。この笠山古窯の立地する瀬田丘陵は、7世紀から8世紀にかけての生産遺跡が数多くみられるところである。製鉄に関する一連の作業、鑄造、須恵器、或いは土師器の製作などという内陸部に於ける高火力を必要とする手工業の中でほとんどの分野のものをやっているといっても過言ではないだろう。また、瀬田地域周辺では8世紀代の官衙的な建物群の存在や、8世紀中葉以降には、間違いなく近江国の国庁が存在して



いたことが知られている。弥生、古墳時代を通じて遺跡の存在の希薄な栗太郡南部である狼川、長沢川、高橋川の小河川水系は可耕地も少なく、同じ栗太郡北部である草津川水系とは異なり、初期農耕社会に於いては顧みられる事の無かった地であったろうと推測される。つまり、狼川、長沢川、高橋川の小河川の水系では農耕にあたって安定した水量を得る事が出来ず、生活の適地にするためには大規模な開発を必要とする地であったと考えられるからである。現在知られている遺跡の分布やそれらの内容から栗太郡南部である瀬田地域を概観すると、7世紀前半頃には丘陵部に人間の手が入りだし、7世紀後半代から丘陵下にも徐々に建物群が建ち並ぶようになる。当時の地域開発の中に1例として、瀬田丘陵付近の遺跡の実態を明らかにする事が社会の機構を明らかにする上で重要になってくるのではないと思われる。

近年の発掘調査により内容が明らかになった瀬田周辺の生産遺跡としては、製鉄に関しては源内峠⁽¹⁾、木瓜原⁽²⁾、野路小野山⁽³⁾遺跡が挙げられ、須恵器生産に関しては、山ノ神⁽⁴⁾、笠山⁽⁵⁾、木瓜原遺跡が挙げられる。その他、新池遺跡⁽⁶⁾については、草津市教育委員会による調査で、窯体らしきものが確認されているが、遺物の出土をみなかった事などから須恵器窯として断定する事は出来ず、現時点に於いては参考資料とするほか無いだろう。また、発掘調査による成果が得られていない遺跡であるが、瀬田天神山遺跡について述べたい。現在、確認されている瀬田周辺の須恵器窯の中で年代的に最も遡り得るのは、山ノ神遺跡の灰原下層⁽⁶⁾から出土している立ち上がりを

有する坏身と宝珠つまみを有する蓋を生産している段階である。滋賀県下で現在確認されている須恵器窯は、和泉陶邑でいうところのTK209からTK217の段階から、推古朝に成立したと考えられる国県制か、或いは、後の郡に対応する地域毎に、古墳時代とは異なり汎近江的な生産が開始されると考えられている⁷⁾。瀬田天神山遺跡は分布調査では、古墳時代の須恵器窯であるとされているが、TK209や、TK217の段階にみられるように、それらは古墳時代通有の坏が生産の主体であることから、以上の結論が出された可能性がある。ここでは、周囲の状況と併せて瀬田周辺の最古の須恵器窯を6世紀末から7世紀初頭に置き、瀬田天神山遺跡をそれにあてるという立場をとるものである。また、月輪南流遺跡は、遺跡分布地図では奈良時代であるとされているが、7



瀬田丘陵周辺の生産遺跡

明治28年測量図に作図

地図	遺跡名	内容	時代
1	瀬田天神山	登窯、灰原	古墳
2	茶屋前	登窯、灰原	不明
3	山の神	須恵器窯、工房	白鳳
4	山の神南	灰原	白鳳～平安
5	源内峠	製鉄	白鳳
6	月輪南流	須恵器窯、鉄滓	奈良～平安?
7	笠山	須恵器窯	白鳳
8	三ツ池	須恵器窯、鉄滓	奈良
9	新池	須恵器窯	不明
10	獅子舞谷	須恵器、鉄滓	奈良
11	木瓜原	須恵器窯、製鉄、鋳造	白鳳～奈良
12	湧濟谷	鉄滓	奈良
13	野路小野山	製鉄、工房	奈良

世紀後半代の須恵器窯があったという意見もある。

笠山遺跡は、昭和39年或いは40年に発掘調査が行われたが、それらは部分的に資料が挙げられたものが主たるもので内容は必ずしも明らかではなかった。そこで小稿では、瀬田周辺の生産遺跡の検討を行うにあたって資料を補うべく、滋賀県埋蔵文化財センターに保管されている出土遺物の内52点をここに紹介するものである。

2. 出土遺物の紹介

この笠山遺跡古窯は、昭和39年或いは40年に滋賀県教育委員会に依って発掘調査が行われた。後の記録によると「壺形土器1、甕形土器3、皿形土器300、蓋形土器10」の出土をみたという⁽⁴⁾。また、特筆すべき事柄として、焼成途中に窯体の天井が崩落し須恵器が現位置をとどめて出土したという。今回は残念ながら出土状況を示すものは管見には及ばなかったが、実見した須恵器のほとんどは還元焼成を受ける前の状態である事を示す赤褐色或いは黄白色を呈するやや生焼けの状況であったり、数点還元焼成を受けているものがみられるものの外面のみであったりという状況であった事から、これらの土器群がおそらくは窯体の床面から出土したものであるという事が推測された。また、これらの中で半ば還元しつつある土器と、生焼けのものとの違いは同一時の所産である事が間違いないとするならば焼成位置の違いによるものであると考える事ができる。

この出土状況は、共存関係を基礎とする須恵器の編年的研究に於いて非常に重要である。しかし、器種に分化が始まる段階に於いては、必ずしも1回の焼成で、或る時期の全ての器種が揃うわけでは無いと考えられている事から資料を過小評価する考えもある。とはいえ、須恵器生産を傾向としてとらえる場合、坏類や、その他の器種の構成を明らかにし、また個々の技法の検討を行い、並行する時期の須恵器窯出土の遺物と比較検討する事に依って、最終操業の床面出土という一回性である資料の乏しさを補えるものであると考える。

今回、実測図を紹介する遺物は、蓋19点、無台坏身20点、有台坏身6点、壺類6点、平瓶1点の合計52点である。それぞれの法量は各実測図に書き込み、蓋の反り径は、括弧の中に書き込んだ。また、回転ヘラ削りの範囲は、コの字で示している。胎土は何れも粒の大きいものを含むこと無く、比較的密である。

以下、それらの概略について述べる事とする。

1、蓋 (実測図1～19)

実測を行った19点の蓋であるが、口径は、13cm程度のもものと15cm・16.5cmにそれぞれの生産のピークを持つ(表-3を参照)丸みを帯びる天井部から、外下方に下りて口縁部に至るものである。調整は、天井部の3分の2程度の範囲を時計回りの方向に回転ヘラ削りを施し、他の部分の多くは、横ナデを施すものであるが、天井部内面の静止ナデには一方向のもの(実測図4・6・8・9・10・13・17)と、多角形を描く(実測図1・3・5・7・12・14・15・16・18・19)2種類のものが見られる。その他は不明である。つまみの形状はボタン状のもの(実測図19)と、ひし形(実測図2・3・13・15・16)と、偏平な宝珠形のもの(その他)の3種類のものが見ら

れる。基本的に反りは、口縁端部より突出する事無く、口縁端面より内側へ後退する。反り径と口径の差は2.0~2.8cmを測り、比較的時間延びた印象を与えるものである。蓋の中で半ば還元している遺物は6点(実測図1・5・13・17・18・22)である。

2、無台坏身(実測図20~39)

実測を行った20点の無台形態の坏身は、口径を11.0~13.2cmに収まるものである。

形態は大きくA~Dの4種に分類する事が出来、また、B類は、法量から2種に分類する事が出来る。以下、分類毎にそれらの概略についてふれる。

A類(実測図20~22) 形態は、底部から内弯気味に上外方へ体部がのびた後、直立する口縁部を持つものである。調整は、底部が切り離し後不調整であり、それ以外の部分は全て横ナデを施すものである。3点は何れも半ば還元している。法量については、器高はまちまちであるが、口径を概ね11cmに揃えている事が特徴として挙げられる(表-2を参照)。実測図20の底部には2条の沈線が施されており、ヘラ記号であると思われる。

B類(実測図23~29) 形態は、平らに近い底部から上外方にのびる体部を持ち口縁部に至るものである。調整は、底部が切り離し後不調整であり、それ以外の部分の多くは横ナデを施し、実測図18を除く全ては底部内面に一方向の静止ナデを施している。これらは、ほぼ同様の径高指数(22)に基づいて生産されたと考えられ、I類は、口径11.0~11.5cmに、II類は、口径12.2~13.0cmに収まる(表-2を参照)。実測図18は、窯クソが大部分に付着していることや、全面に還元されている事から数次の焼成を受けている可能性がある。その他3点が半ば還元している(実測図23・24・27)。

C類(実測図30~38) 形態は、底部から上外方にのびる体部を持ち口縁部が外反するものである。B-II類に比して器高の高いものである。調整はB類と同様、底部は切り離し不調整であり、それ以外の部分の多くは横ナデを施し、底部内面には一方向の静止ナデを施す。口径は、12.3~13.2cmの間に収まり、概ねB-II類と口径を同じくするものであるが、器高はB-II類が3.5cmを中心にするのに対してC類は4cm以上のものを中心とする(表-2を参照)。半ば還元を受けているものは1点のみである(実測図35)。

D類(実測図39) 形態は、深味のある器形で、丸みを帯びた底部から上外方にのびる体部をもち、口縁部に至るものである。調整は、底部が切り離し後不調整で、それ以外の部分は回転ナデを施す。ここでは、1点のみがみられる。

3、有台坏身(実測図40~45)

実測を行った計6点の有台形態の杯身は、実測個体数が少なかった事に起因するのか、口径はそれぞれにまとまりをもち12.6~15.2cmの間のものがみられる。しかし、器高に関しては、4.5~5.0cmの間に収まる事が特徴の一つとして挙げられる(表-1を参照)。調整は、底部が切り離し後不調整で、それ以外の部分の多くは横ナデを施している。高台は貼り付けである。底部内面の静止ナデは、一方向のもの(実測図40)と、多角形を描くもの(実測図43・44)が確認されたが、その他は不明である。高台の形状は、ハの字状にしっかりとふんばり、外方に肥厚する(実測図40・41・43・44・45)ものが大半を占めるが、外傾する凹面をもつもの(実測図42)もみら

れる。半ば還元しているのは2点である（実測図40・42）。

4、壺類（実測図46～51）

壺類としたものの内、実測図46～49の3点は長頸壺である。実測図46・47は、何れも頸部より上を欠失しているが、肩部は、外方に張り出し、体部最大径を、3分の2上位に有した後、ゆるやかに屈曲して下内方に下りる。底部は、ほぼ平らかでハの字型を呈する高台を付し。端部は上下に肥厚する。実測図46は、肩部の文様を持たないのに対して、実測図47は、刺突文の押し引きによる装飾を施している。調整は、実測図46は、体部下半4分の1程度を反時計回りの方向に回転ヘラ削りを施し、他の部分を横ナデを施しているのに対して、実測図47は、叩き目を横ナデによって擦り消している。実測図48・49の頸部は、外弯しながら上外方へのびた後短く外方へ開き端部は面をなす。何れも頸部上半に2条の沈線を施している。半ば還元を受けているのは2点である（実測図48・49）。

実測図50・51は、大津市山ノ神古窯出土遺物に類例を求める事の出来るものである。山の神古窯出土例では短い頸部が上外方にのびている事から、これら2点は何れも頸部を欠いているものの同様の形態をもつものと考えられる。実測図51は、体部上半にカキ目調整を施している。また、2点は何れも底部に不定方向のヘラ削りを施す他は横ナデを施している。

5、平瓶（実測図52）

肩部は外方に張り出し体部最大径を3分の2上位に有した後ゆるやかに屈曲して下内方に下りる。外反して開く口頸部を持ち端部は丸くおさめる。体部下半には反時計回りに回転ヘラ削りが施され、他の部分は横ナデを施している。頸部に2条の沈線が施されている。

3. 出土遺物の検討

計52点の須恵器について検討を加え、瀬田丘陵の生産遺跡群を構成するものの1つとして如何なる位置にあるかという事を明確にするための作業を行わなければならない。まず、生産された器種の分類から供膳形態のものを中心に器種の分化について把握する事が挙げられる。次いで、大きく生産の傾向について周辺の生産地での傾向との比較を行わなければならない。ここではこの2点について検討を行う事とする。しかし、用いた資料の持つ制約から、後述するように十分な検討が行い得ないものがある。ここでは、方法論的な試みとして、また、検討の内容は、予察として行う事を、予め断っておきたい。

(1)笠山古窯出土遺物の検討

まづ、笠山古窯出土の土器群から、無台坏身、有台坏身について検討を加える事とする。

無台形態の坏身は、ここでは形態の違いからA～Dの4類に分類し、更に法量の違いからB類を2つに分類したので、合計5つの形態に分類した。また、これらのA～D類を大きく2つに分類することが可能であると考えられる。形態的にも、調整に於いてもグルーピングし得るA類とD類は、7世紀以来の宝珠つまみの蓋にともなう坏身の系譜にあるものであろうと考えられる。山の神古窯に於いても多くみられる形態である。D類の出土は1点のみなので検討を加え難いが、A類として生産された3点は、器高こそまちまちであるが口径をほぼ11cmに揃えている。ここで

は、口径を揃える事に重点が於かれたが故に、B・C類に見られるように口径と器高を揃える技術がありながら、器高を揃えるという事が顧みられなかった為であろうと考えられる。このことは、これらの坏身が重鉢形態をとらないという事を示しているのかも知れない。

一方、B・C類は前者に比べて異なる様相を呈しているといえるだろう。B類は、径高指数を同じくして相似形である同様の形態を目指すものが生産されている。またC類は、B-II類と口径を同じくして器高による違いという点で分化している。これらB・C類は、前者とは異なる形態を指向する一群ではないかと考える(9)。B類は、重鉢形態を指向する一群として、また、C類は、重鉢形態から派生した分化の方向を示すものとしてとらえられるのではないだろうか。ここでは、宝珠つまみ付きの蓋が生産され始める金属器をそのまま模倣した段階から、もう1つの金属器の持つ特質である重鉢形態を須恵器も指向し始めた段階として仮に位置づけておきたい。つまり、径高指数に沿って分化し重鉢形態をとるが故に蓋を必ずしも必要としなくなったのがこれら一群で、その後の省力化、大量生産化の流れと、前述した新たな形態の導入が、有蓋無台の所謂坏Gの存在意義を捨象し、無蓋無台の所謂坏Aという器種を安定した型式としてこの段階以降成立させたのだと考える。

次いで、有台坏身に関して、器高を揃えるという指摘が従来からなされているが、今回は実測点数が少なくにも拘らず同様の結果がでている⁽¹⁰⁾。この現象について、飛鳥・藤原・平城の編年と尾張国での須恵器生産とを対比しながら概観する事とする。

飛鳥IIIでは、坏Bはみられ、3つに器種分化しているものの資料が少ないためはっきりした分化の方向性は分からない。

飛鳥IVでは、坏Bは5つに器種分化する。径高指数に沿って分化するものと、同一の器高で分化するものが見られる。

飛鳥V・平城Iでは、坏Bの器高は、約4cmで揃えられ、口径による分化を見せている。また、径高指数に沿った分化もみられる。

尾張のI-17号窯は、ほぼ7世紀後半に相当し、飛鳥III・IVに並行するものであると見られている。ここでは、坏Bは、器高により3系統に分かれ、口径を加えると7つに分けられる。

同じくS-78号窯は、7世紀末から8世紀初頭にかけての時期で飛鳥V・平城Iに並行するものであると見られている。坏Bは、器高を揃え、口径による分化をするものと、同一口径で、器高を揃えるものがある。

以上、有台坏身である坏Bは、出現した当初から器高を揃えるという傾向がみられる。この理由について明確に述べる事は出来ないが、おそらくは、坏Bの出現期に於ける無台坏身の分化の状況に起因するものではないかと推測する。

(2)生産の傾向について

次いで大きな生産の傾向について周辺遺跡の資料を用いて検討を加える事とする。ここでは、大津市山ノ神古窯の灰原上層と灰原中層⁽¹¹⁾の土器群と、八日市市壺焼谷古窯⁽¹²⁾の土器群の3者と笠山遺跡古窯の土器群の生産の傾向を、生産の中心を占めている坏・蓋の口径の分布をグラフ化することにより検討を加える事としたい。いずれも既刊の報告書の図版から計測値を求めたもの

で必ずしも個々の数値は正しくない。また、本来なら破片を含めた数量計測を行うべきであろうが時間的な理由などにより、報告書の図版から、或いは笠山遺跡古窯に関しては実測可能なもののみから読みとったものである。そのため数量的に十分な検討を行い得るものではなく、今回の1つの試みとして行い、今後改めて詳細な検討を行うべきものである。

A、大津市山ノ神古窯灰原中層出土土器群

灰原からの出土遺物であるが灰層は、「かなりの層に細分されるが灰層の間にある黄色粘土や白色粘土層あるいは灰層の堆積状況から概ね15層に分けられ、大別すると上、中、下の3層に分ける事ができた」と報告されている事から、現時点では層位的なまとまりを前提として、上層と中層の土器群についてみてみることにする。

グラフに示すように生産の主体は宝珠つまみを持つ蓋と、無台坏身であり、若干量の有台坏身がみられる（ここでは立ち上がり有する坏Hが数点見られるが、図が煩雑になる事を避けるためグラフ化は行わなかった）。生産のピークは、蓋では口径11cm、無台坏身は口径10cmである。有台坏身は生産されているとされるものの、坏身にとまなうはずの蓋の生産量に影響を与え得ない程度の量である事が指摘できる。また、蓋と無台坏身の生産のピークは、数量的にほぼ対応している。

個々の遺物についての形態的特徴としては、蓋のつまみは、きれいな宝珠形か乳頭状に近い形状を呈しており、天井部のヘラ削りも比較的丁寧に行われているという傾向がみられる。

B、大津市山ノ神古窯灰原上層出土土器群

グラフに示すように、破線で示した有台坏身の生産量が多くなっていく段階である。無台坏身の生産のピークは、口径10cmと灰原中層とかわりはないのであるが、蓋に関しては口径10cmと口径13.5～5～14、5cmに2つの生産ピークを持つ事がわかる。これは、有台坏身が口径13.5～15.0cmに一定量の生産を行いピークをもったことに対応するものとして、蓋に灰原中層にみられなかったもう1つの生産のピークが形成されたものであると考える。しかし、ここでは無台坏身のピークが生産量が50点を越え、蓋のピークを生産量を遥かに凌駕して数量的に対応しない事が問題として残る。

個々の遺物の形態的特徴としては、蓋の宝珠つまみも、灰原中層の土器群と比較すると、宝珠形が崩れ偏平な形状に変化している。

D、八日市市壺焼谷古窯出土土器群

ここでは杯蓋に反りの無いものが反りのあるものとともに出土しており大津市山ノ神遺跡古窯より型式的に後出するものである。先に挙げた2者と比較すると、グラフが大きく違う事が指摘できる。無台坏身は13.5cmに生産のピークを持つのだが、それに対応する蓋の生産のピークが見あたらない。一方、有台坏身はいくつかの小さな生産のピークを口径14.0cm以降に持つものがあるが、それに対応するかのように蓋にもいくつかの小さい生産のピークを成形している。このグラフに表された時期は、草津市木瓜原古窯の前半期にあたるかと考えているが、現在整理途上なので明確にはし得ないものの、同様の傾向をもつものであろう。

以上のように山ノ神遺跡の灰原の時間的前後関係のわかる2者A・Bと、杯蓋の反り消失時を

示し形態的に後出する要素を持つ八日市市壺焼谷古窯Dを比較すると、時間軸の上では相対的にA-B-Dと順序づける事が出来る。以上の理解から、再度A・B・Dとした3つの段階に於ける生産の傾向について検討する事とする。

Aとした段階では、坏Hは、わずかに残るものの、あくまでも生産の主体は坏Gの坏身・蓋のセットであり、坏Bは出現しているものの生産の主体とはなり得ないものである。

Bとした段階では、Aの段階でも見られた坏Gの坏身・蓋のセットに加えて坏Bのセットが生産の主体となるものである。ここでは、無台杯身を一括して取り扱ったため無蓋無台の坏Aが出現していてもグラフには、直接現れない場合も想定し得る。

Dとした段階では、坏Gのセットが崩れ、無蓋無蓋の坏Aが明確にグラフに現れる時期である。有蓋形態のものは、有台坏身に限られ、坏Bのセットを形成し、坏Aとともに生産の主体となり得るものである。

そこで、笠山古窯出土土器群の生産の傾向を見てみると、計測数が少ない事がネックであり、正確な傾向を把握できているとはいえないが、前述したようにA・B段階で多くみられる坏Gのセットとなると考えられる無台坏身A・D類と、7世紀末以降通有の坏Aに見られる形態をとると考えられる無台坏身B・C類が共存している事に気づくのである。そこで、山ノ神古窯灰原上層出土土器群を再び見てみると、実測可能な報告書図版から読みとった限りに於いては、前述したように、異なる2系統の無台杯身の口径が近似しているが故にグラフに直接現れ出る事の無かったという状況を想定する場合、坏Gのセットが崩れるという笠山古窯と同様の生産の傾向を示すものとしてとらえる事は不可能ではないだろう。また、Bとした段階の中でも、形態的な特徴からみた差や技法の変化などがみられない場合でも、蓋とセットになる無台坏身とそうでない無台坏身の量比によって細分し得ると考えられることから、山ノ神古窯灰原上層の段階を前に、笠山古窯の段階を後に位置づけることが可能であると考えられる。今後更に詳細な検討が必要であるとするものの、ほぼ同様の大きなニーズの中でこれら2つの須恵器窯が、操業されていたと考えてよいだろう。

(3) 瀬田丘陵に於ける須恵器生産について

ここで、瀬田丘陵の須恵器生産の相対的前後関係について若干整理しておきたい。瀬田丘陵周辺の栗太郡南部に於いて須恵器生産が開始されるのは、現在内容は明らかではないものの7世紀の前半代の、瀬田天神山古窯であろうと考える。ここを起点に、内容の明らかな山ノ神古窯が後出するものとして操業を開始している事が確認される。そして、山ノ神古窯灰原上層とほぼ並行する時期のものとして、笠山古窯と、近隣に立地し、内容は明らかではないものの月輪南流遺跡をそれにあてる。それ以降木瓜原古窯に至るまでは遺跡の内容は明らかではないが、前述した新池遺跡、或いは三ツ池遺跡がこれらの間を埋めるものになり得る可能性があるといえるだろう。こうして推定した須恵器窯の相対的な前後関係をふまえて遺跡の分布を見てみると丘陵裾の瀬田天神山古窯に始まり、(茶屋前遺跡)・山ノ神古窯・(月輪南流遺跡)・笠山古窯・(新池遺跡)・(三ツ池遺跡)・木瓜原古窯と順次、草津川水系に至るまで南から北の方角へと移動していくという状況が読み取れる。また、製鉄遺跡との関係では、現在確認されているものの中では、木瓜原遺跡

でのみ、場を同じくして、他の遺跡では明確な棲み分けがなされている。これらの問題については、ここでは明確にする事は出来ないため今後の課題としたい。

4. おわりに

笠山古窯の窯体に残された土器群を紹介し、方法論の試みとして、また、検討の予察として若干の考察を加え瀬田丘陵生産遺跡群の中での位置づけを行う事を試みたが、とりとめの無い論になったのではないかと懸念している。

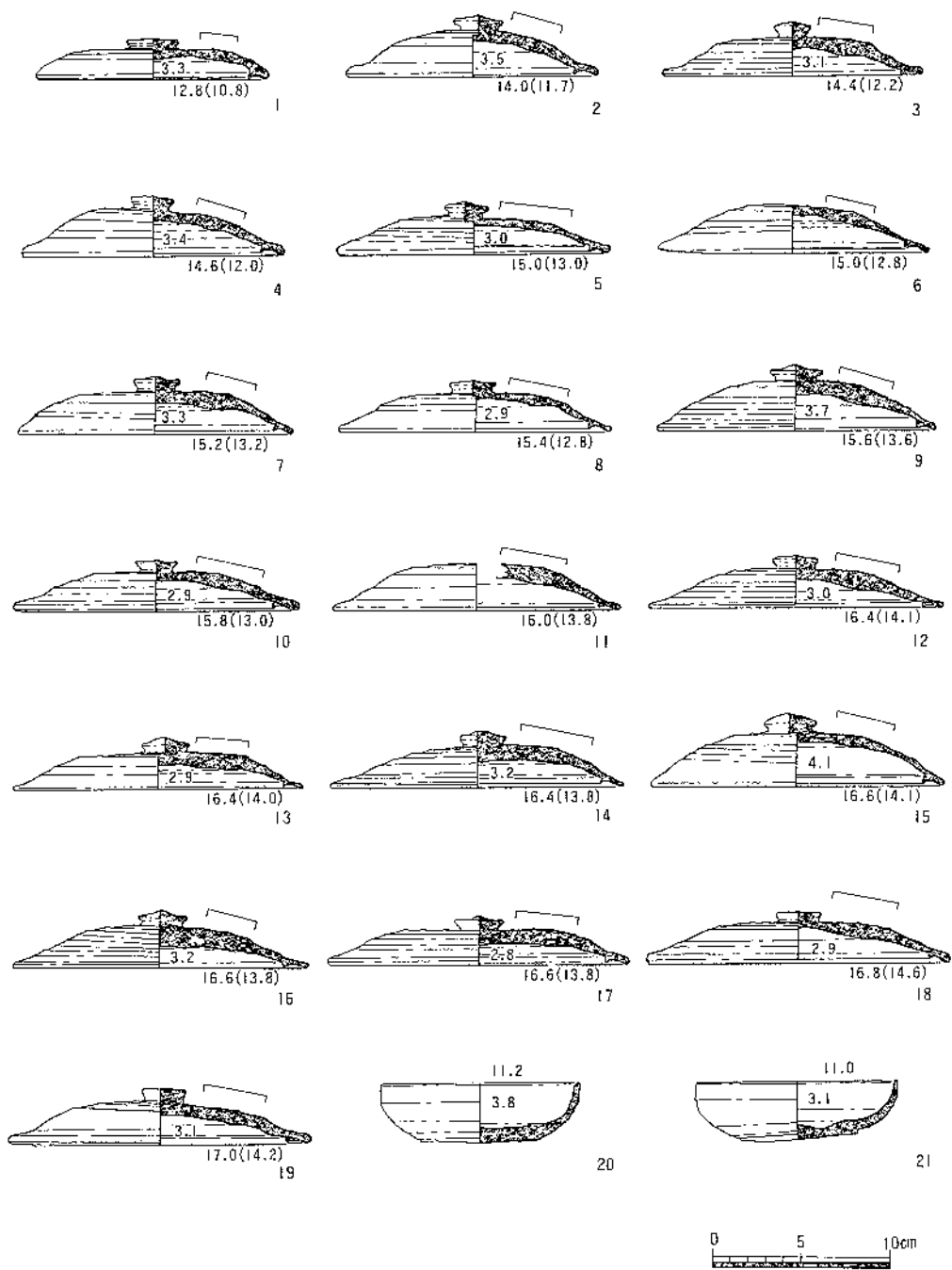
大きな生産の流れの中で器種の消長を把握るべく生産地での一括して取り扱える土器群を選び、供膳形態のものを主にそれぞれの口径の分化と、それぞれの杯身と蓋の対応関係をグラフ化した。加えて、ここの遺物の口径と器高の計測値をグラフ化すると共に形態的な分類を行い、また、各形態ごとの法量の分化についてみた。これら相互を組み合わせる事に依って、生産の傾向が明確にし得るものであると考えた。しかし、今回は、山ノ神古窯や、壺焼谷古窯出土の土器群はこの分類を行わなかったため十分な分析を行い得ず、全て報告書から読みとったため、破片も含めた蓋と杯身の対応関係を追求する事が出来なかった。また、瀬田丘陵生産遺跡群の性格付けも今回は行い得なかった。今後、以上の点をふまえて更に検討を加えたい。

以上、今回の紹介に於いて至らぬ点がある場合は全て筆者の責であり、また、検討の内容については諸先学の御叱正を乞うものである。

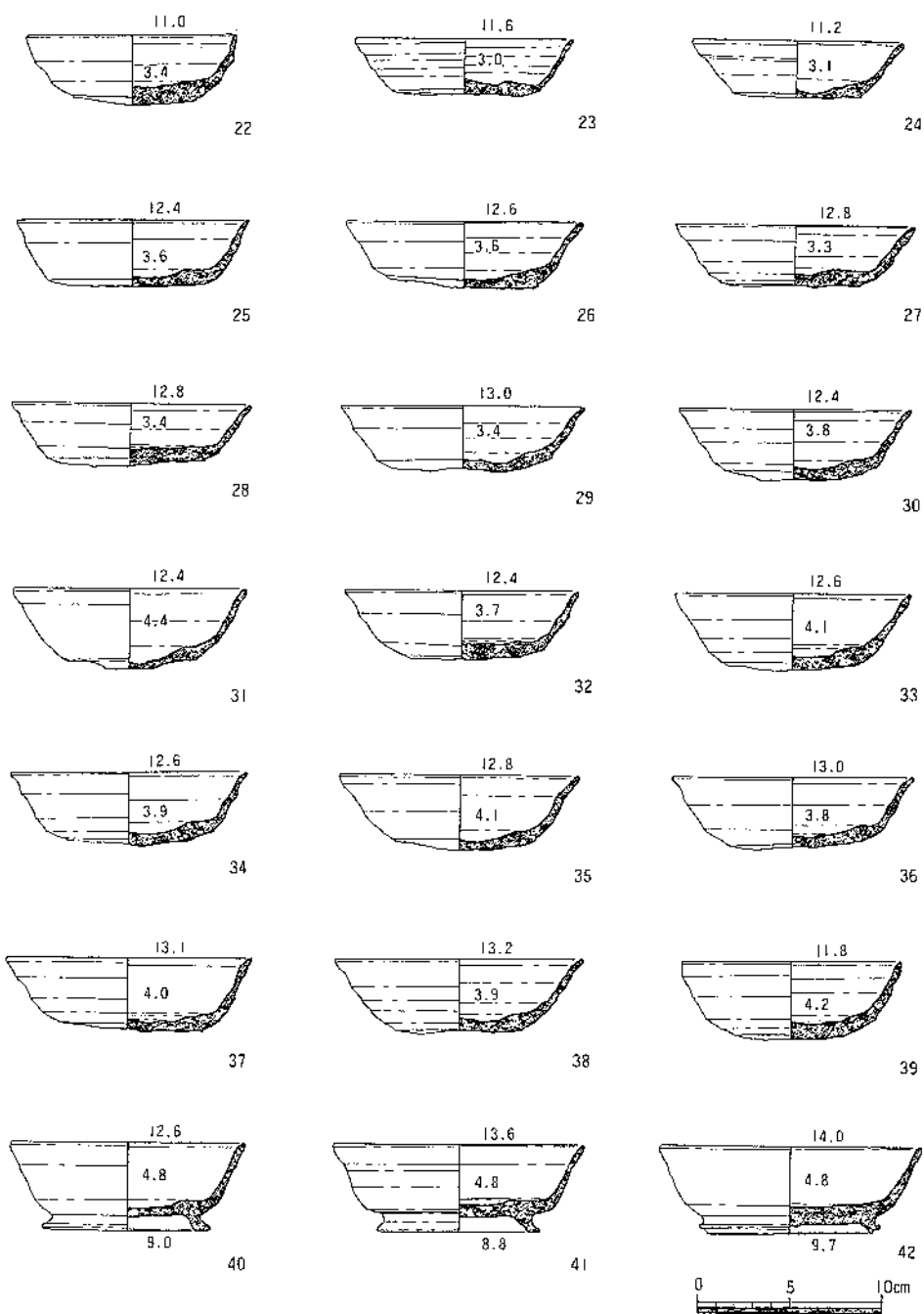
なお、本稿の作成にあたっては、水野正好・江南洋・三宅弘氏にお世話になった。ここに記して謝意を表します。

註

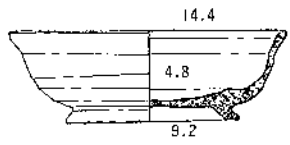
- (1) 近藤 滋『源内峠遺跡試掘調査報告書』滋賀県教育委員会 1978年
- (2) 横田洋三ほか「木瓜原遺跡現地説明会資料」滋賀県教育委員会 1992年
- (3) 大橋信弥ほか『野路小野山遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会 1990年
- (4) 須崎雪博『山ノ神遺跡発掘調査報告書』1985年、『山ノ神遺跡発掘調査報告書II』 大津市教育委員会 1991年
- (5) 『昭和61年度 滋賀県文化財年報』滋賀県教育委員会 1968年
- (6) 須崎雪博『山ノ神遺跡発掘調査報告書II』大津市教育委員会 1991年
- (7) 松澤 修「近江の須恵器」『埋文ニュース』第46号 滋賀県埋文センター 1984年
大崎哲人「滋賀県における古代窯業生産の展開」『史想』第21号 京都教育大学考古学研究会 1988年
林 純「近江における古墳時代須恵器生産の特質」『滋賀考古』第6号 1991年
- (8) 『昭和49年度 滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会 1976年
- (9) 西 弘海「土器様式の成立とその背景」1987年
- (10) 城ヶ谷和広「七、八世紀における須恵器生産の展開に関する一考察」『考古学雑誌』第70巻 第2号
- (11) 前掲(6)
- (12) 石原道洋『壺焼谷遺跡発掘調査報告書』八日市市教育委員会 1991年



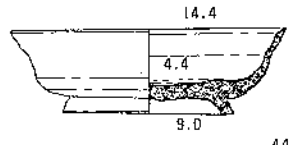
笠山古窯出土遺物実測図



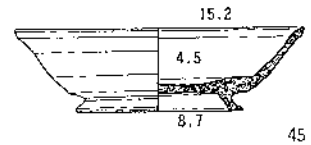
笠山古窯出土遺物実測図



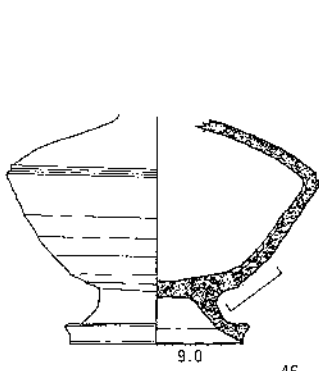
43



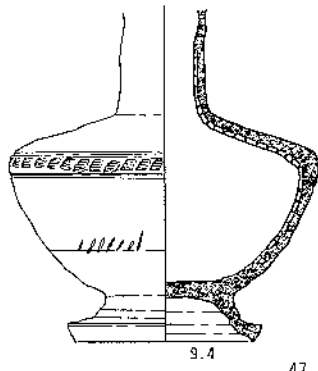
44



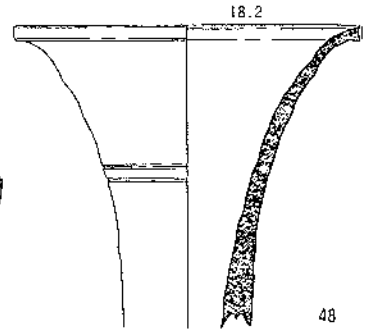
45



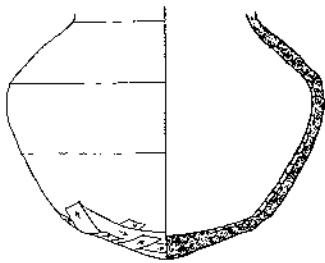
46



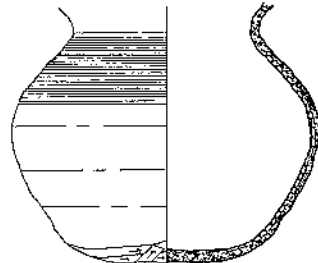
47



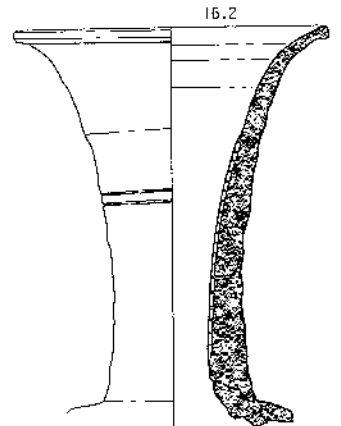
48



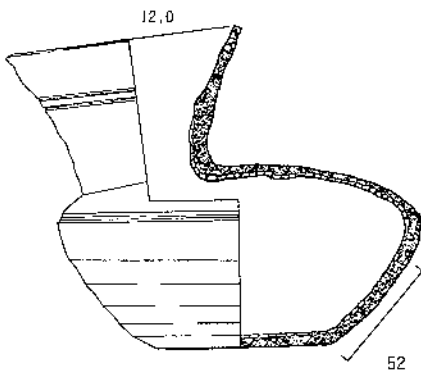
50



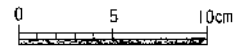
51



49



52



笠山古窯出土遺物実測図

表-(1) 笠山古窯出土 有台坏身 法量分布図

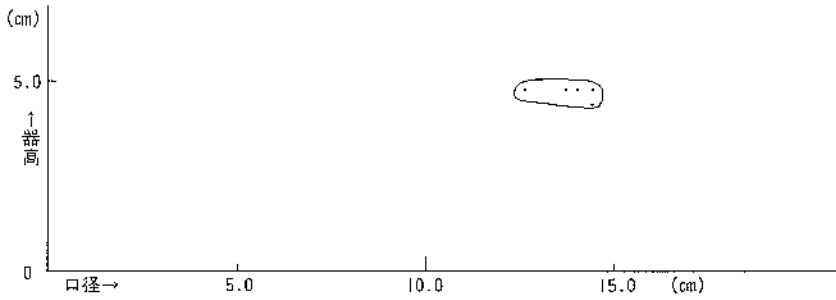


表-(2) 笠山古窯出土 無台坏身 法量分布図

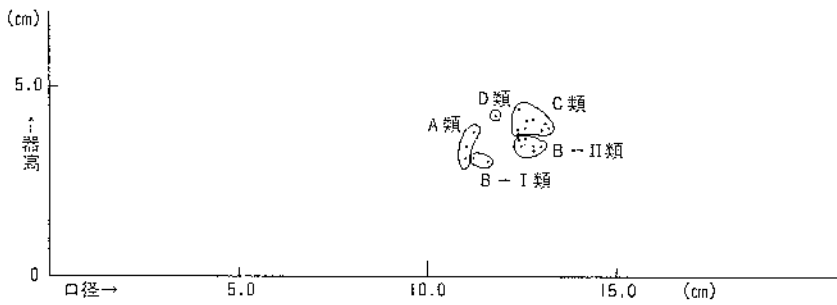
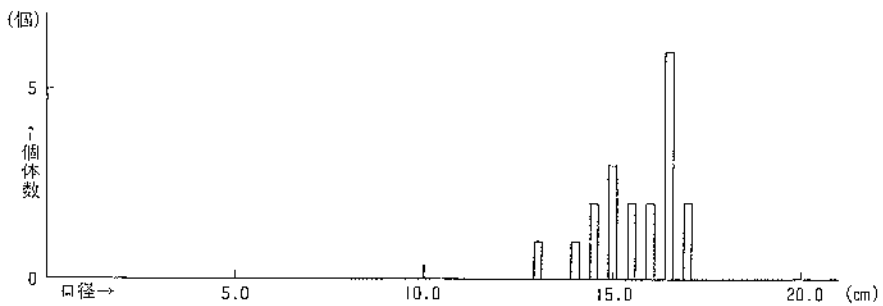
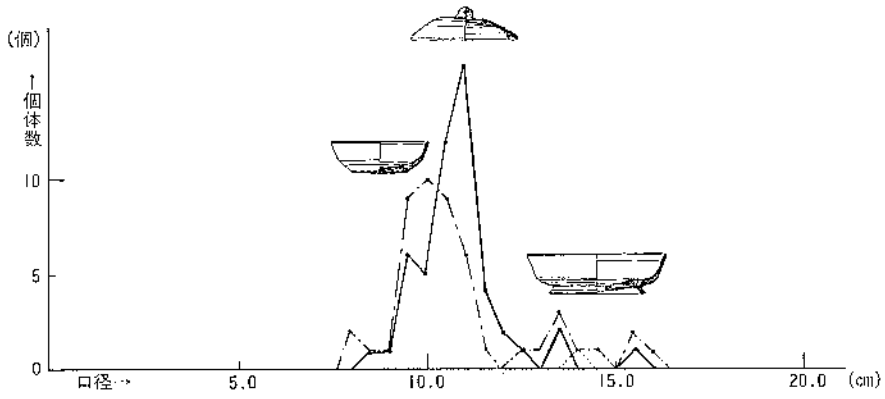


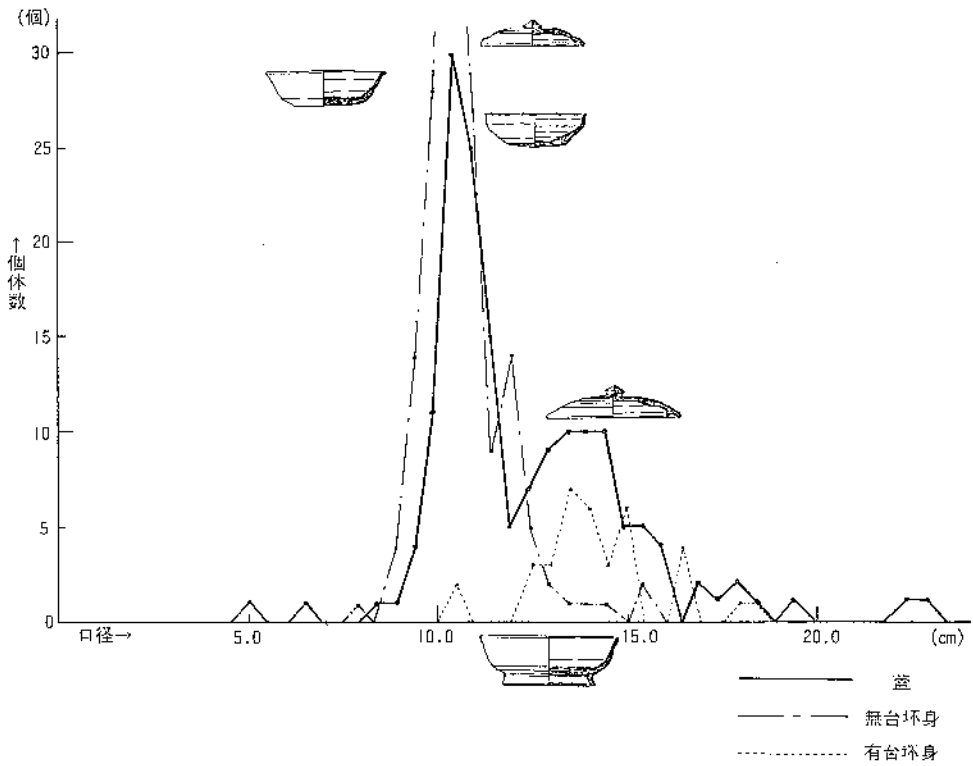
表-(3) 笠山古窯出土 蓋 口径分布図



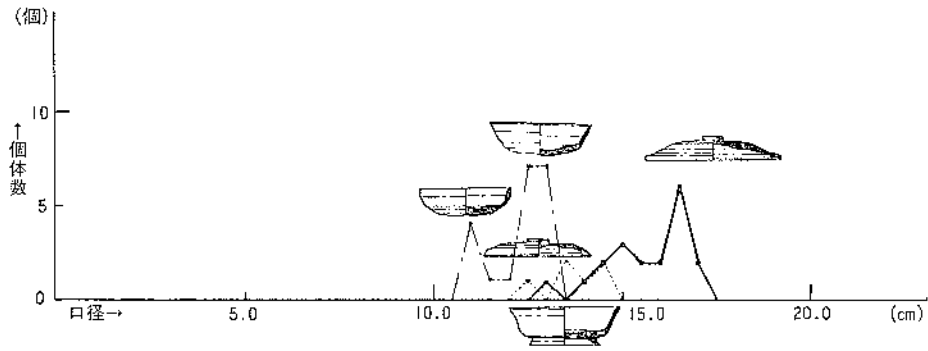
A 大津市 山ノ神古窯 灰原中層出土土器 口径対応表



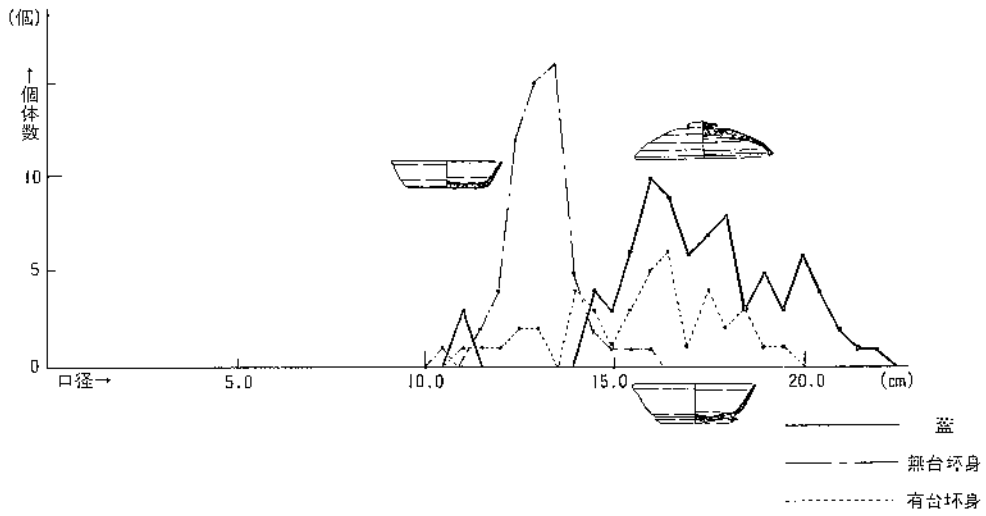
B 大津市 山ノ神古窯 灰原上層出土土器 口径対応表



C 草津市 笠山古窯 最終操業床面出土土器 口径対応表



D 八日市市 壺焼谷古窯 出土土器 口径対応表



編集後記

今年の『紀要』は例年になく原稿の集まりが早かった。これも偏に各執筆者の日々の精進の賜物か。

今後も、洛陽の梓価を高めるような『紀要』であり続けたい。

編集者

平成5年3月 初版

平成6年3月 2刷

紀 要 第 6 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

Tel(0775)48-9780・9781

印 刷 宮川印刷株式会社

大津市富士見台3番18号

Tel(0775)33-1241